

# 『3018 地点の蜂起』と『登山鉄道』

— エーデン・フォン・ホルヴァートの改作意図 —

狩野 智洋

## 1 序

『3018 地点の蜂起 (Revolte auf Côte 3018)』<sup>1)</sup> (1927年11月4日ハンブルク・カンマーシュピーレ (Hamburger Kammerspiele) にてハンス・ロット (Hans Lotz) の演出によって初演。以下『蜂起』と略記) はエーデン・フォン・ホルヴァート (Ödön von Horváth, 1901-1938) の最初の戯曲であり、1924年から1926年までのチロル・ロープウェイ (Tiroler Seilbahn) 建設に取材している。賃金支払いの滞りと約束された賃金引き上げの不履行が原因となって、1926年5月労働者達が蜂起した。<sup>2)</sup>ロープウェイ建設では少なくとも4名の死者を出したが、<sup>3)</sup>作品ではこのストライキで3名が犠牲となっている。また、実際の蜂起は5月に起こり、賃金をめぐる問題が主なその原因といわれているが、作品では10月に設定され、極度に厳しい気象条件下での過酷な労働がその発端として描かれている。まさに Zugspitzbahn の完成という輝かしい業績の影で苦しんだ労働者たちにスポットを当てようとしたものである。(S. 285)

しかしクリシュケによれば初演の評判は芳しくなく、例えば雑誌『文学』の評者は、作者の個性が全く見受けられない、と述べ、また他の劇評も、ゲルハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann, 1862-1946) の『織工』 (Die Weber, 1892) の下手なコピーだ、と酷評している。<sup>4)</sup>

この初演のあとすぐにホルヴァートは改作に着手しているが、<sup>5)</sup>ホルヴァートの改作がいかなる意図のもとで行われたのかを本稿で明らかにしたい。そのため先ず『蜂起』と、同じく労働者 (織工) の蜂起 (織工一揆) に取材したハウプトマンの『織工』とを簡単に比較して『蜂起』の性格付けを行い、次いで

『蜂起』とその改作である『登山鉄道 (Die Bergbahn)』<sup>6)</sup> (1929年1月4日ベルリン・フォルクスビューネ初演、ヴィクトール・シュヴァネケ (Viktor Schwanneke) 演出) とを比較し、改作の意図を明らかにしようと思う。

## 2 『蜂起』と『織工』

### 2.1 テーマ・取材

『織工』は、問屋制支配下の農村手工業者・家内工業労働者の絶望的状况に端を発した、1844年のシュレーゲンの織工一揆に材を取ったものである。ハウプトマンは1891年と92年に織工一揆の目撃者や織工の家族らからの聞き取り調査や織工の悲惨な生活の研究を行っている。<sup>7)</sup>『織工』は1840年代にドイツに輸入された新織機によってただでさえ乏しい収入に大きな打撃を受けた織工達の、人間生活とは言えないほどの惨状と蜂起の途中までを描き出している。<sup>8)</sup>この背景には、新織機の導入による工場主間の価格競争があり、一番弱い立場にいる織工達はその負担を一手に負わされた。

他方情熱的な登山家で幾度となくツークシュピッツェ山に登り、山小屋の主人とも懇意にしていたホルヴェートは、山小屋でロープウェイ建設に携わった労働者達と会い、気象状況、不十分な装備、粗末な食事、賃金支払いの遅滞、逼迫する工期、事故、現場監督との衝突等に関する衝撃的な事実を知り、作品にしている。<sup>9)</sup>先にも触れたように実際の蜂起は賃金の遅滞と合意された賃金の引き上げが実施されなかったことに起因しているが、『蜂起』では逼迫する工期を理由とする厳しい気象条件下での労働の強制がその発端として描かれている。当時、オーストリア側のチロール・ロープウェイとドイツ側のバイエルン・ツークシュピッツ鉄道が先陣争いをしており、そのしわ寄せが労働者達の過酷な条件に反映していた。<sup>10)</sup>

このように『織工』と『蜂起』には実際に起きた蜂起に取材し、かつその蜂起の背景には、経営者間の競争とそのしわ寄せを受け、搾取される織工・建設労働者達という、経営者対被雇用者という階級闘争的な図式がある。

## 2.2 方言

『織工』はその前身であるシュレーゲン方言で書かれた方言劇 „De Waber“ を文章語に近づけたものであり、翻訳劇として公にされたが<sup>11)</sup>、依然として方言が多用されている。ハウプトマンは『織工』を翻訳劇とし、かつまた『織工』でも方言を頻繁に使用することで方言を重視する姿勢を示している。

一方ホルヴァートは『蜂起』の傍注として、この作品では方言は文献学的、心理学的な問題以上のものであり、環境や個人あるいは単なる状況の持つ特徴的性格を表すために用いられている、と明言している。(S. 46) 従ってホルヴァートは極めて明確な意図を持って東部アルプス方言を使用している。

このようにハウプトマンの『織工』とホルヴァートの『蜂起』では共に方言が極めて重視されている。

## 2.3 主人公

『織工』は個人ではなく、集団が主人公となった劇だと言われている。この作品では一人の人物の生き様を描くことではなく、織工一揆が起るまでを、そして織工それぞれが蜂起に加わらざるをえなくなった事情や職人達の葛藤を描くことに主眼がおかれている。そこではまた、織工達を搾取する経営者らが厳しい競争下におかれていた事実にも触れられている。従って『織工』は一人乃至は数人の中心人物を描くのではなく、織工一揆が起こった状況を主に動物以下の生活を強いられていた織工達<sup>12)</sup> に対する同情を交えて描いていると言える。

『蜂起』においても事情は同じで、職を求めてドイツ北部の港町シュテッティーンから南端の現場まで赴き、雇用された初日に不十分な装備故に滑落死した元理髪師シュルツ、乱暴者のモーザー、かつて兵士として中国の戦地へ赴いたオーバーレらの台詞の多さは突出しているが、筋が彼らを軸に進行しているとは言い難い。これらの登場人物を描くと言うよりは、失業の不安を背景にした労働者らのおかれた苦しい状況、劣悪な条件下でも労働を余儀なくされて

いる彼らの事情を、主に労働者達の台詞から伝えようとしている。また、暴力を否定し、他の労働者達から「使徒 (Apostl)」（S. 62）と皮肉られ、最後に技師に射殺される（S. 82）最長老のオーバーレは、信仰故に一揆に反対し最後まで一揆に加わらず、最後に官憲の銃の流れ弾に当たって命を落とす『織工』の老ヒルゼ<sup>13)</sup>の姿とも重なる。『蜂起』においても特定の主人公ではなく、労働者達の劣悪な労働条件とその下で働かざるを得ない労働者達の悲哀が描写の中心に置かれている。

上記のように『織工』と『蜂起』は資本家に搾取され苦しい生活を余儀なくされている織工や労働者の蜂起をテーマとし、方言が重視され、また特定の主人公を持たない点に共通性が見られる。また、老ヒルゼとオーバーレの悲劇は、信仰深いまたはそう思われている老人が蜂起に反対し、逆に鎮圧者の銃弾によって命を失うという極めて共通度の高い構図を持っている。従って、『蜂起』が『織工』のコピーであるという意見は妥当性を持っている。また、『織工』が様々なエピソードや織工以外の人物の台詞をも通じて織工達の惨状を描き出し、複眼的具体的に描写しているのに対し、『蜂起』では労働者達の台詞のみから、すなわち言葉のみによって単一の視点から労働者らの窮状を伝えようとしている点は、前者に対し後者の表現力が著しく劣っていることを示している。この点から、『蜂起』を『織工』の「下手なコピー」だとする評価もあながち不当ではない。

先にも述べたように、ホルヴァートは『蜂起』の初演のあとすぐに改作に取りかかっている。次にこの改作がどのような意図の下に行われたのかを考察したい。

### 3 『蜂起』の改作

『蜂起』の改作である『登山鉄道』では、全体的にト書きや不要な台詞の削除により、表現がより簡潔になっている。しかしページ数そのものは両作とも本稿で用いたテキストでは43頁と変わらない。それは主に技師に関係する部分が増えたためである。

ここではこの改作が何を意図したものを明らかにするため、まず初めに、技師に關係する部分の変更点について考察し、次いで、その変更の意味をより明確にするため、技師に關係する変更されていない部分について一例を挙げて考察を加えたいと思う。また、技師は直接登場しないが、ラストシーンの変更に関しても言及する。

### 3.1 技師に關係する部分の変更点

#### 3.1.1 技師登場の場面

技師が初めて登場する場面に変更が加えられている。

『蜂起』：技師が単独で労働者たちのいる飯場に登場。（S. 63）

『登山鉄道』：技師が監査役と二人で労働者たちのいる飯場に登場。（S. 105）

『蜂起』では技師が労働者たちの、その場に居合わせる唯一の上司であることから、労働者対技師という構図ができ、労働者と対立する技師という印象が生じる。一方、『登山鉄道』では技師は上役である監査役と共に登場することにより、資本家を象徴する監査役と労働者の中間に位置することとなり、労働者と対立する技師という構図が回避されると同時に、労働者と監査役の間に挟まれている、いわゆる中間管理職としての技師の位置づけが行われる。

#### 3.1.2 技師とオーバーレ、他の労働者たちとの会話場面の追加

『登山鉄道』では『蜂起』にない、技師とオーバーレ及び他の労働者達の会話の場面（S. 107ff.）が第二幕の冒頭に追加されている。この場面を詳しく検討してみたい。

まず、飯場の外でのオーバーレと技師の会話を考察する。

技師：台の上立って空を見上げている。

オーバーレ：飯場から出てきて技師の隣に立つ。

技師　ぎくりとする。：ああ、あなたか、オーバーレ！

オーバーレ：今ぎくっとしたんでねえすか？

技師：誰が？

オーバーレ：あんだが！

技師：私が？笑う。

オーバーレ：あんだあ、とぬかぐ<sup>すんけえすつ</sup>神経質んってすと。

技師　棘のある言い方で：そうかね？

オーバーレ：あんだあ、とぬかぐ<sup>はだら</sup>働ぎ過ぎだ。何でも自分<sup>ずぶん</sup>一人でやろうと思っ  
ては、わがんね。

技師：私個人を研究するのは止めてもらいたい。

沈黙

何がお望みかな？

オーバーレ：ただ確かめでがったんですがす。どうなっか。

技師：一体何が。

オーバーレ：天気ですが。—— あんだだって天気は<sup>すんべえ</sup>心配すてんでねえのす  
か？

技師　不安から一層嘲笑するように：あなたの観察眼には驚くばかりだ。

(S. 107)

隣に立ったオーバーレに身をすくませた (zusammenzucken) 技師の反応とオーバーレの台詞から、技師が過労からくるストレスによって神経過敏な状態にあることが窺われる。また、オーバーレの技師を思いやる言葉に対する技師の拒否的な反応と、何でも自分一人でやろうとしてはいけないというオーバーレの台詞からは技師が孤立した立場にあることを読み取ることができる。技師がごまかしつつもオーバーレの観察眼を認めている点から、技師自身もこれらの点を認めていることになる。

同じくこれに続くオーバーレと技師の会話にも技師の孤独と不安が表現され

ている。

技師：天気はもつ。

オーバーレ：岩壁ば通すては見えねがす。上の方ではもすかすたらもう雪降ってっかもしゃねね、尾根のあつてでは。こんなぬ静すずがなのが、おらぬは気に入らね。

沈黙。

技師 殆ど独り言のように：もつ、もつ、もつ。私はアイディアを売ったんだ。私は計算違いをしたんだろうか？ 惨めな契約だ。これは金の問題じゃないんだ。・・・何故あなたにこんな話をしているんだろう？

オーバーレ 微笑とぎどぎんで：時々はどうすても話はなすばすねっけねぐなるもんですがす。あんだあもう、いっつも一人ではがりいっから。

(S. 108)

オーバーレの最後の台詞は技師が常に孤独で、他人と言葉を交わすことが殆どないことが窺われる。契約を後悔するかのような技師の台詞は、技師が契約相手であると同時に自分の雇用主である会社に対し不信感を抱いていることを暗示している。また、工事の進捗が天候によって大きく左右されることから来る懸念も技師の心を重くしていることが分かる。

冬が訪れ天候が変わった後の解雇と失業を案ずる労働者達と技師との会話を次に考察する。

マオラー：んだ、つまりはこういうごどさ。天気はせいぜいのとごろ3日すかもだね。それ以上は無理だ。そすたらあんだあこっから出でて構わね。んだども俺おらだづがすぐ出でたらば、まだ、下すたのライトドノイキルヒェンあどばつなぐ市街電車すげえでんしゃですぐ雇やどってもらえっかもしゃねげつとも・・・んだどもその後はどこも雇やどってけつとごなどね。そんで、どうすてもただの天気すでえなんだごつて、俺おらだづはすぐにでも出でぐがもしゃねがら。

技師：君たちは気でも狂ったのか？

ズィーモン：<sup>おら</sup>俺だづは首きられんのすか、そうでねえのすか？！

技師：先ず第一に、天気はもつ。

ハンネス：そんなぬ<sup>たす</sup>確かな事<sup>ごと</sup>すかや？

技師：第二に、誰も解雇しない。

ズィーモン：そいづはそんなぬ<sup>たす</sup>確かなのすか？

技師：我々がそうしなければならぬのだ！誰も解雇しない！

沈黙。

オーバーレ：<sup>ぎす</sup>技師さん、あんだ<sup>かすこ</sup>あ賢い人ですが。・・・あんだだけで決められるっつうのは本当でがすか？あんだだけで？

(S. 108f.)

失業の不安をかかえる他の労働者たちとの会話からは技師が労働者たちに同情し、その立場を深く考慮していることが窺われる。またオーバーレの最後の台詞によって、労働者の雇用に関する技師の無力さが観客に強く印象づけられるとともに、技師の上位に位置する監査役の存在が意識される。

以上新たに追加された技師と労働者達の会話は、主に技師の孤独と労働過多から来る神経過敏症、会社に対する不信感、また失業の不安におびえる労働者達に対する同情と無力さが浮き彫りにされると同時に、労働者達と会社幹部の間に挟まれた中間管理職としての苦しい立場が印象づけられるように書かれている。

### 3.1.3 技師と会社の監査役との会話の場面

この会話場面は技師と監査役のそれぞれの立場の違いが鮮明になる場面である。

『蜂起』：二人で山上の現場に登った直後に設定。(S. 69)

『登山鉄道』：監査役が飯場の外で贅沢な朝食を取っているところに、技師が一仕事を終え、現場から下りてきた時点で設定されている。(S. 113)

『蜂起』では二人が行動を共にしていることにより、彼らの距離の近さ、親密さが印象づけられ、『登山鉄道』では彼らの隔たりと、労働者に近い技師の立場が暗示されている。

ここでこの会話の内容についてその概要を述べる必要があると思われるので紹介する。この会話は技師と監査役の立場の違いを鮮明にするもので、天候によっては数日後の工事終了と一年間の開業延期を主張する技師に対し、会社の利益を守るためにこれ以上の遅延を決して認めようとしない監査役が、会社がすでに技師の特許権を取得しており、技師を解雇して他の技師を雇用することもできると脅しをかけ、労働者達に強い態度で臨み決して工事を遅延させないことを技師に強く迫る内容となっている。この会話に関しては後に更に詳しく検討する。

『登山鉄道』ではこの会話の前に追加された部分があるが、この部分に関して次に述べたい。

### 3.1.4 追加された技師と監査役との会話の場面

先の技師と監査役の会話に追加された場面について考察を加える。この会話には4、5ヶ月の間女気なしでいられる技師を訝しんだ監査役の台詞が先行している。

監査役：思うに、あなたは人を愛するなんて全くできないでしょ。あなたはそういう洞窟の聖者なんでしょ？

技師：どういうつもりで「愛」とおっしゃっているのかわかりませんが。

監査役：私はあなたが愛の何たるかをご存じないのではないかと疑っておるんですよ。愛はこの上なく尊いもの、天の賜物です。神よ！だいたい誰にでも自分の心を捧げる相手はいるものです。・・・私は自分の子供たちを非常に愛しています。なのに決して子供たちには会えない。仕事が忙しすぎるんです。・・・あなたには家族に対する関心がない。あなたはご自分の仕事にもか

かわらず、破壊的な人物だ、はっはっ、上手いしゃれた。

(S. 114)

監査役による技師の人物評であるが、監査役は彼を「洞窟の聖者」と呼び、家族に対して無関心だと評しているが、彼のこの台詞には、技師が自分の仕事のために他の全てを犠牲にしていることが暗示されている。また、前述の技師と労働者たちとの会話を考慮するならば、監査役が必ずしも技師を十分に理解していないことが分かると同時に、先に見たこの後に続く会話から、自分の家族を大切に思う一方で労働者達の人権を軽視する監査役に、監査役からは愛を知らないとされながらも労働者への同情を禁じ得ない技師が対置される。

### 3.1.5 技師と労働者たちの言い争いの場面での技師の台詞と労働者の台詞の入れ替え

この部分は、十分な装備を与えられず平地で履いていた靴のまま作業し足を滑らせ滑落死したシュルツを飯場に降ろした後でなければ作業を続けまいとする労働者たちに対し、監査役から圧力をかけられた技師が業を煮やして全員の解雇を告げた直後の台詞である。技師の告げた解雇に対する労働者達の怒りの声がこの台詞に先立っている。

『蜂起』：技師：怒り出して。契約したわけではない。(S. 79)

『登山鉄道』：マオラー：嘘つき！嘘つき！（S. 125）

『蜂起』では技師が労働者達を雇い入れながら、最後に正式な契約を結んでいないことを楯に解雇を正当化しようとする卑怯な人物という印象を与える。『登山鉄道』では、技師は監査役から圧力をかけられたばかりか、部下の労働者たちからも一方的に責められ、追いつめられる苦しい立場にいる人物という印象が与えられる。この後、労働者に殴られ、恐怖を感じた技師はピストルで、

間に入ったオーバーレを射殺し、襲いかかるモーターをも撃つ。自分は岩壁から飛び降りて自殺する。

### 3.2 変更されていない技師と監査役の議論

ここでは先に触れた技師と監査役の会話（『蜂起』 S. 69ff.、『登山鉄道』 S. 114ff.）を扱う。これは『登山鉄道』でも変更が加えられていない部分であるが、変更を受けていない部分を考察することによって変更の意味がより明らかになると考えられるので詳しく考察してみたい。

先ず先の監査役による技師の人物評に続く部分を検討する。

技師：ここからはロープウェイの最終区間を最も良く見渡すことができます。ご覧下さい。あの下の方、あの礫で覆われた氷河の先端の上方に4番支柱があります。明るい場所です。標高2431メートルです。

監査役 双眼鏡を覗いて：確かに！

技師：およそ1200メートルでゴンドラは5番支柱に到達します。その上方、黒い岩壁の左、あの赤褐色の場所です。発破をかけました。標高3018メートル。587メートルの高度差を7分そこそこで登ります。

監査役：最高記録だ！そして深甚なる敬意を払おう！— 私たちの間では、先般の監査役会でこういう発言があった。あなたは仕事に取り憑かれている、と。あなたの取り憑かれ方は素晴らしい（kapital）ものだ。言葉の真の意味で「資本（Kapital）」だ！それにシュタイン枢密顧問官は、祖国にいるのがこのような男ばかりなら私たちの状況はもっと良くなるのだが、とおっしゃっていたよ。私はそれにこう付け加えよう。そしたらこの驚異的な仕事は、あなたの驚異的な仕事は3週間後には操業可能になっているだろう！

技師：今日までは10月が我々に好意的でした。余すところ僅か4日で、補助ケーブルが5番支柱に架かります。課題は計画通り進んできました。後は雷雨がきても構いません。昼夜ぶっ通しでも。

（『蜂起』 S. 69f.、『登山鉄道』 S. 114f.）

監査役の台詞から、技師が極めて優秀かつ勤勉であると万人に認められていることが分かる。先に引用した監査役の技師に関する「洞窟の聖者」等の人物評と併せて考えるなら、技師の勤勉さが禁欲的な生活によって支えられていること、個人的に多大な犠牲の上に成り立っていることが窺われる。ここから自分の能力の粋を集めたこの仕事に対する技師の並々ならぬ思い入れを読み取ることも可能となる。

つぎに両者の対立が顕在化する会話に考察を加えてみたい。

監査役：なんて暴風だ！服の中まで突き通す。

技師：準備作業を予定より早く打ち切らざるを得なくなると、勿論その結果として――

監査役 彼を途中で遮り：ちょっと待った！これ以上の遅れは我慢できん！

技師：我慢しなければならぬかどうかは荒天次第です。これからの4日間がやまず。その後気象は10月中に急変します。そしたら冬眠です。その上春の訪れが遅くはかばかしくないと、ともすれば操業開始は丸1年延期ということもあるでしょう。

(『蜂起』S. 70、『登山鉄道』S. 115)

監査役の台詞は工事日程が決して順調に進んでおらず、むしろ遅れ気味であることを示唆している。更に今期の工事も天候の変化によって後4日しかできないこと、更に天候によっては操業が1年延期せざるを得ないという、予断を許さない状況にあることが技師の台詞から理解される。従って先に検討した『登山鉄道』で追加された技師とオーバーレの会話の場面が、工期の遅れから来る技師の内面の焦りと不安を描いていると言える。

上記の技師の台詞に以下の会話が続く。

監査役：何？何ですと？！全く、何を言ってるんだ！1年だと？！

技師：場合によっては！

監査役：嘘だ！嘘だ！それは死だ！無だ！破産だ！

技師：私の得た情報に間違いがなければ、ボーデン銀行が会社に興味を示したそうですが。

— 中略 —

監査役：その通り。全くその通り。それで？

技師：本当なんだ！それなら私は無理に急ぎませんよ！いいですか、私は最後の力を振り絞ります。しかし、自然には誰も太刀打ちできません！しかしボーデン銀行は支払うことができます。2年余計にだって払えますよ！

監査役：20年余計にだって払えるさ！

技師：ご覧なさい！

監査役：分かってますよ。しかしあなたには分かってないようだ！会社にとっては、缶詰だろうと、玩具だろうと、登山鉄道だろうと、何で稼ぐかは全く関係ない。いいですか、問題なのは会社であって、あなたの仕事なんかじゃない！日を追うごとに私たちの身が削られていくんだ。私たちは多くを失い、私たちの何百万という金は数字以前のゼロの羅列になってしまう。

技師：それは誇張でしょう。

監査役：勿論あなたにとっては、自分の計画で金銭面のリスクを負うのが誰だろうとどうでもいいことだろう！

技師：何もリスクになっていませんよ。

監査役：あなたがそんなことを言うのか！

技師 強い調子で：で、あなたは？

監査役：はっはっはっ！これであなたが理想主義者だってことがはっきりした！あなたは文字通り雲の中に建設してるってわけだ。はっはっはっ！いいかね、私たちは商人なんだ。従って単純な人間ではない。

技師：私の仕事は商売じゃない。

（『蜂起』S. 70f.、『登山鉄道』S. 115f.）

技師の計画に対し会社はその収益性を見込んで投資し、ロープウェイを建設していることがこの二人の会話から知られる。しかし技師にとっての眼目はと

もかくも自らのプランを実現することであり、自らの技師としての能力を最大限に発揮し、人々の驚嘆するロープウェイを建設することである。そのために費やされる資金やそれによってもたらされる収益など彼には問題ではない。一方会社にとって投資した資金を回収し利潤を上げることはいうまでもなく至上命令であるが、技師はこれを顧慮しようとしな。まさに世事に疎く、「洞窟の聖者」と呼ばれるに相応しい思考パターンを有する人物であることが分かる。但し、「聖者」という言葉が技師の禁欲的な勤勉、真摯を暗示しており、先の技師と監査役の追加された会話は、ここで取り上げた会話と相まって技師の性格をより深く描写していると言える。

今度は技師の微妙な立場を浮き彫りにする会話を検討する。

監査役 にやりとして：あなたはご自分の立場を誤解しておられるようだ。

技師：この仕事を完遂するためなら、私は何も厭いません！

監査役：その通り！こちらも同様！金を失わないためなら、会社はこう言う。

「いいですか！私たちはあなたの特許権を獲得した。営業認可もだ！」

技師：それはどういう意味ですか？

監査役：ははあ！当ててご覧なさい！会社は僅かしかないが、技師はごまんといる。技師なら。同じ能力を持ったのが。その上急かされるのも厭わない、もし・・・その上労働者どもにも断固たる処置に出る！この先般のストライキ未遂など前代未聞だ。

技師：いつのことです？

監査役：去年のことだ。二週間悪天候が続いたと思ったら途端に賃上げで脅迫だ！あの下種どもは義務というものを知らんのだ。いいですか、もっと強く！もっと断固として！あなたはいつ・・・

技師 遮って：いつ私がそうでなかったと？何が私に欠けていたと？よくよく考えてみて下さい！クラウドの件がありますし、例の3人の件も — 私が意気地なしだったとおっしゃるんですか？

監査役：いかなる場合であろうとも正当化され得ない、何の根拠もない従業員  
の苦情はきっぱりと退けなければなりません。我々は強制しなければなら

い。たとえ硫黄が降ろうとも！

技師：お互いすれ違いですね。

監査役：有り難いこと！本当に！しかし 20 世紀になってもまだこんな風に  
天気左右されなくちゃならないとしたら余りに悲しいことだ！というわけで  
営業開始がまた延期されるようなら、たとえ数日の延期だろうと、あなたはク  
ビだ。

技師：はっはっはっ！ — それなら私たちが交わした契約はどうなるんです？

監査役：裁判を起こさない！

技師：そんなことはあなた方にはできっこない！

監査役：あなたにはそんなことはできっこない！私たちにはできる！それ以上  
のことだってできる！

（『蜂起』S. 72f.、『登山鉄道』S. 117f.）

ここで技師は自分の立場の弱さを監査役によりいやと言うほど思い知らされる。既に技師の特許権を獲得し、営業許可をも取得した会社にとっては、会社の意向に従わない技師を解雇し、自分たちの思い通りに働く技師を新たに雇うことは造作もない。契約を楯にとって解雇は不可能であるという技師の主張に対して監査役は全く動じることがない。追加された技師とオーバーレの会話にあった「私はアイデアを売ったんだ。私は計算違いをしたんだろうか？ 惨めな契約だ」（S. 108）という技師の独り言のような台詞が、この技師と監査役の立場の違い、前者の立場の弱さをここにおいて尚更強く印象づける機能を有していることが明らかとなる。同様のことが追加された技師と労働者達の会話についても当てはまる。労働者達の解雇をきっぱりと否定した技師に対し、技師だけで労働者達の雇用を決定できるのかと問うたオーバーレの台詞（S. 109）は技師の立場の弱さを暗示しているが、今や自分の雇用すら守ることができない技師が会社の意向に反してまで労働者達の雇用を守ることができないことは明白である。それどころか労働者達と同様いつ解雇されるか知れない弱い立場にあることが明らかとなる。

この部分から、追加された上記二編の会話は技師の立場の弱さ、不安定さを

より鮮明にする効果を有していることが分かる。

以上変更の加えられていない部分を考察することによって、追加された部分の機能に検討を加えた結果、それぞれの追加箇所が技師の性格、彼のロープウェイ建設に対する意気込みと自己犠牲、工事日程から来る技師の不安と焦燥感、世事に疎い性格、また、労働者達と変わらぬ立場の弱さや不安定さをより鮮明にするためにもうけられたものであることが明らかとなった。即ち、技師に関係する部分の変更が、技師の人物像と弱い立場をより明確にするためのものであることが分かる。

### 3.3 ラストシーンの変更

この場面は技師と直接関わるものではないが、間接的に登場人物達と技師の関係に微妙な影響を及ぼすのでここに取り上げる。

『蜂起』：技師に拳銃で撃たれ山を下りられず孤独に死んでゆくモーザーの最後と官憲による蜂起の鎮圧の暗示。(S. 87f.)

『登山鉄道』：技師の最後と事件の知らせを受け、蜂起のもたらす結果を恐れる監査役とそれをあざ笑う労働者。(S. 130ff.)

この変更により、労働者の悲劇が過度に強調されることを防ぎ、そしてまた、社会階層としての労働者と資本家が最終場面に残っているのに対し、岩壁から飛び降りて自殺した中間層である技師の不在が、逆に技師の存在感をクローズアップし、彼の極めて不安定な立場を強調することになる。

### 3.4 改作の方向

改作について以上に論じた点をここで整理することにする。

先ず、技師登場場面の変更により労働者対技師という対立構造が回避され、労働者達と監査役に挟まれる中間管理職としての技師の立場が明確にされる。

また追加された会話はそれぞれが技師の人物像やその立場の弱さ・不安定さをより克明に描き出すための変更であった。最後にラストシーンの変更は労働者達の悲劇を後方に押しやると同時に、技師の不在が逆にその存在感を際立たせる結果となっている。

上記の点から、この改作が技師の人物像・存在を際立たせる方向で行われたことが分かる。即ち、労働者と資本家の中間に位置する技師の立場と人物像を明確にし、技師を主人公にするための改作であったと言える。『登山鉄道』に関してホルヴァートは「この両者〔資本層と労働力〕の間に立つ、この戯曲の主人公は技師であり、彼によって生産過程におけるいわゆる知識層の立場の特質が明らかとなる」<sup>14)</sup>と述べているが、この発言とも改作の分析結果は一致している。

#### 4 結語

ホルヴァートは「自分の時代の忠実な記録者」として大衆を描き、「私は今全く意識的に古い民衆劇を破壊している。形式の面でも倫理の面でも — そして民衆劇の新たな形を見出そうと努めているのだ」と述べている。<sup>15)</sup>先にも触れたように彼は『蜂起』の発表後間もなく改作に取りかかっている。『蜂起』の評価は低く、ハウプトマンの『織工』の下手なコピーとまで酷評されたが、本論前半で検討した様に、取り扱ったテーマや方言の使用、更には主人公が個人ではなく蜂起（一揆）を起こした労働者（織工）集団であるという点まで一致していた。従って彼は既に35年前に提出された作品と本質的に変わるところのない劇を舞台に掛けたことになる。

しかし『蜂起』の改作『登山鉄道』は前作と異なり好評を博し、2000席を擁するフォルクスビューネで20回の公演が行われた。<sup>16)</sup>また全集の解説によるとクルト・ピントゥス(Kurt Pinthus)はこの作品を「未来を指示する社会時事劇」(S. 286)と評したという。ホルヴァートが初演の直後に改作に着手したことを考えるなら、当時から彼が民衆劇の新たな形を見出そうとしていたと見なしでも必ずしも不当ではあるまい。

この改作が労働者と資本家の間に位置する中間管理職としての技師の立場と人物像を明瞭にし、技師を主人公として明確に打ち出すために行われたことは本論で明らかにした通りである。1844年の織工一揆では蜂起の矛先は織工の困窮の上に富を蓄えた大商人の館、工場及び彼らの困窮をもたらした自動織機であり、織工と資本家の対立の間には未だ技師というものの存在はなかった。従って1892年発表の『織工』にも当然ながら技師は登場しない。その35年後に発表されたホルヴァートの『蜂起』では技師は登場するもののその立場は曖昧で寧ろ資本家のそれに近い印象を与え、人物像も十分に描かれているとはいえない難いものだった。ホルヴァートはその改作で労働者と資本家の間に位置する技師の立場を明確にし、その人物像により陰影を与えた。それによって主人公たる技師の存在感をより高めると同時に、ドイツの技術が再び世界の指導的地位を回復したこの時代に「生産過程におけるいわゆる知識層の立場の特質」を明らかにして、作品に独自性と斬新さを与え、『織工』の下手なコピーという汚名を返上し、改作を成功させることができたのである。

## 注

\* 本稿は1998年5月23日に学習院大学で行われた「学習院大学ドイツ文学会研究発表会」において口頭発表された原稿に加筆したものである。

- 1) テキストとしては次のものを用いる。  
Horváth, Ödön von: Revolte auf Côte 3018. In: Ders.: Zur schönen Aussicht und andere Stücke. (Hrsg. von Traugott Krischke unter Mitarbeit von Susanna Foral-Krischke) Frankfurt/M (Suhrkamp), 1985. S. 45-88  
以後この戯曲集からの引用等は本文中にページ数のみを記す。
- 2) Lunzer, Heinz / Lunzer-Talos, Victoria / Tworek, Elisabeth: Horváth. Salzburg (Residenz Verlag), 2001, S. 57
- 3) ebd., S. 57
- 4) Krischke, Traugott: Ödön von Horváth. Kind seiner Zeit. Berlin (Ullstein), 1998. S. 63f.
- 5) ebd., S. 64
- 6) テキストとしては次のものを用いる。

- Horváth, Ödön von: Die Bergbahn. In: Ders.: Zur schönen Aussicht und andere Stücke. S. 89-132
- 7) 横溝政八郎 『ゲルハルト・ハウプトマン——人と作品』 郁文堂 1976年 S. 109
  - 8) ハウプトマンのテキストは以下のものを用いた。  
Hauptmann, Gerhart: Ausgewählte Dramen in vier Bänden. 1. Bd. Berlin (Aufbau-Verlag), 1956. S. 441-537
  - 9) Lunzer / Lunzer-Talos / Tworek: Horváth. S. 57
  - 10) ebd., S. 57
  - 11) 横溝政八郎 『ゲルハルト・ハウプトマン——人と作品』 S. 110
  - 12) Hauptmann: Ausgewählte Dramen in vier Bänden. S. 468
  - 13) ebd., S. 536
  - 14) Cronauer, Willi / Horváth, Ödön von: Interview mit Ödön von Horváth. In: Krischke, Traugott (Hrsg.): Materialien zu Ödön von Horváths > Glaube Liebe Hoffnung<. Frankfurt/M (Suhrkamp), 1973. S. 7-32, hier S. 12
  - 15) Horváth, Ödön von: Gebrauchsanweisung. Fassungen und Lesarten. In: Krischke, Traugott (Hrg.): Materialien zu Ödön von Horváths »Kasimir und Karoline«, Frankfurt/M, 1973. S. 99-117, hier S. 106
  - 16) Krischke, Traugott: Ödön von Horváth. Kind seiner Zeit. S. 65

# „Revolte auf Côte 3018“ und „Die Bergbahn“ Ödön von Horváths Bearbeitungsabsicht

## Karino Toshihiro

Das im Jahr 1927 uraufgeführte Volksstück „Revolte auf Côte 3018“ von Ödön von Horváth hatte keinen Erfolg. Die soziale Thematik des Aufstands der Arbeiterschaft, die Benutzung des Dialekts und die Abwesenheit des sogenannten Helden hatte das Stück mit dem 1892 veröffentlichten Drama „Die Weber“ von Gerhart Hauptmann gemein und wurde deshalb dessen schlechte Kopie genannt.

Unmittelbar nach der Uraufführung bearbeitete Horváth das Stück um und brachte die Neufassung unter dem Titel „Die Bergbahn“ auf die Bühne. Er stellte Szenen um, vereinfachte den Ablauf. Aber die größte Veränderung bestand darin, dass er die Figur des Ingenieurs umfangreicher beschrieb. Durch diese ausführlichere Beschreibung wurde die Stellung dieser Figur zwischen Kapital und Arbeitskraft viel evidenter. In „Die Bergbahn“ gibt es jetzt einen Helden, der „zwischen den beiden Parteien steht“ und „die Stellung der sogenannten Intelligenz im Produktionsprozess“ charakterisiert. Die Uraufführung hatte dann auch Erfolg.

Der Erfolg kommt wesentlich daher, dass der Autor mit dem Ingenieur eine Figur konzipierte, die nicht im Stück „Die Weber“ aufgetreten war - und zwar eine Figur als Helden, der ein Zeichen der Neuzeit darstellte. Damit gelang es dem Autor, dem Publikum „ein soziales Zeitstück, das in die Zukunft weist,“ zu zeigen. Horváth verlieh einer schlechten Kopie Originalität und Neuheit - und konnte dadurch den Erfolg erringen.